



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

俗説を超えて

「中絶手術は妊娠前の状態に戻す魔法ではない」

「近親相姦の被害者である12才の女の子に中絶を否定するなんて事が出来ますか?」ある中絶支持者は憤慨して言います、「それに、暴力的なレイプの被害者に加害者の子を生ませるなんてあなたはそれでも愛を尊ぶクリスチャンと言えるのですか」

中絶反対者なら誰でも、何らかの形でこのような抗議を受けた事があるでしょう。これらの問は、1. 中絶反対者は無神経な胎児愛好者である、2. 状況次第で中絶を許容する倫理的に無定見な人々である、のいずれかを証明しようともくろむ感情的な問です。

残念な事に、中絶反対者の多くはこのような抗議に対抗する事が出来ません。なぜなら暴行による妊

娠に対する誤解が、あまりに広く世間に行き渡っているからです。その典型的な例として、賛成派と反対派の双方が、暴行で妊娠した女性は中絶を望むものであり、中絶が受けた暴力から立ち直る何らかの手助けになるという仮説を認めている事が挙げられます。こうなると中絶反対者は生命の神聖さの方が

誰もが当然同情するべき性暴力の被害者の希望より重要であると論じる事になり、不愉快な立場に立たされます。

しかし実際は、暴行による妊娠でも母と子の幸福は相反するものではないのです。母も子も受けた暴力を永遠に記憶していく事ではなく、「命を守る」事で救われるのです。

レイプや近親相姦の場

合、なぜ多くの人が間違った考えに達してしまうのでしょうか。それは当の被害者たちの声が討論の中でいつも無視されているからです。そのため、暴行されたが妊娠しなかった女性も含めて、多くの人は、偏見と恐怖心から、現実とかけ離れた考えを持つようになるのです。

例えば、レイプで妊娠した被害者は、通常当然中絶を望む者と考えられています。しかしそういった女性に関する調査で75%から85%の人が中絶に反対と答えている事をサンドラ・マコーン博士は見いだしました。この事実一つをとってみても暴行の被害者は中絶を望む者であるとかあるいは中絶が最良の解決になるという考えは再考すべきである事が

分かります。

中絶しない事については、いくつかの理由が挙げられます。先ず第一に、多くの女性が中絶を合法的に選べるようにするべきだと考えていながら、全女性の約70%が中絶を道徳的に反していると考えている事、そして、レイプで妊娠した女性の約70%は中絶は自分の身体や子どもに対する第2の暴力となると信じています。

第二に、授かった生命には、自分達も知らない何か特別な意味や目的があるのではないかと考える人もいます。この子は、思い出してもぞつとする行為によってもたらされた者であるけれど、神様が、あるいは運命がより良いもののためにこの子を役立てて下さるのではないかというのです。善は悪からも生まれるというわけです。

第三に、被害者は自分の

内面を見つめるようになり、生命に対する価値観や他人への思いやりが高められます。暴力の被害者になった自分が今度は中絶で子どもを犠牲にするなどという考えは不愉快なものでしょう。

第四に、少なくとも被害者の潜在意識の中に、出産を成し遂げる事が出来ればレイプをも乗り越える事が出来るという気持ちがあるのかも知れません。

とんどの人はこの事を考える事さえしません。そのかわり、中絶によって被害者は少なくともレイプを過去のものにし、生活を続ける事が出来ると考えています。しかし、この結論に飛ぶ際に、人々は中絶に對して非現実的な考えに陥っているのです。

報告している事実から述べましょう。中絶からレイプへの連想はたやすく理解できません。中絶は、マスクをした見知らぬ人間によって身体を犯され、生殖器官を検査される苦痛を伴います。手術台に乗ったら最後、自分の身体を思い通りに動かせません。手術の途中でやめて欲しいと頼んでも、無視されるか、または「もう遅いよ、自分で決めた事だろう。始めた以上は終わらせなければ。」と言われるくらいでしょう。そして、なす術もなく横たわっている間に、彼女の中の生命は子宮から文字通り吸い出されてしまうのです。

関わらず、前にもレイプの経験がある女性が、より強く連想するようです。レイプの経験のある女性がないう女性に比べて、中絶の間やその後、苦しむ傾向にあるのはこの事が原因の一つになっていきます。

ジャッキー・バッカーも同様の経験をしています。「レイプの記憶が薄れた後も、中絶の余波は長い間続きました。虚しさや恐怖感を感じました。心の奥底に苦痛があり、そのために悪夢にうなされたり、ひどく落ち込んだりするなんて、誰も私に教えてくれませんでした。みんな、中絶をすればこれまで通り何事もなかったように生きていけると言ったのですから。」

出産する事で、失ったプライドを取り戻す事が出来るのです。望まない妊娠であった場合は特に出産するという事は全くの献身的行為である。勇気と強さと名誉を示すものだからです。自分は加害者より善良で、自己中心的で破壊的な加害者に比べて自分は寛大であり、生産的である証となるのです。

中絶は被害者を妊娠前に戻す魔法の手術ではありません。むしろそれは現実の出来事であり、往々にして大きなストレスや精神的外傷をもたらすものです。このように、中絶事態が女性の人生に影響を及ぼす出来事であるならば、妊娠した被害者の特別な事態について十分に考えなければなりません。中絶は果たして彼女を救うのか、それとも既に傷ついた心を更に追い込むのか。

この疑問への答えとして、先ず多くの女性が中絶を屈辱的で残忍な医学的レイプであると感じたと

この経験に基づき中絶からレイプへの連想は多くの女性が持っています。特に、現在レイプによって妊娠しているかどうかにか

調査によると、どんな事情であれ中絶の後女性が罪悪感を持つたり、落ち込んだり、自分が「汚れた」という意識を持つたり、男性を怨んだり、プライドを失ったりするのはよくある事なのです。ここで重要なのはこれらの感情が通常レイプの後に女性が感じるのと全く同じである事です。つまり中絶はレイプで受けた深い傷を更に悪化させるのです。被害者の心の重荷を癒すどころか、むしろ加担するわけ

出産がプライドを回復するとすれば、中絶は何をもたらすのでしょうか？

この疑問への答えとして、先ず多くの女性が中絶を屈辱的で残忍な医学的レイプであると感じたと

この経験に基づき中絶からレイプへの連想は多くの女性が持っています。特に、現在レイプによって妊娠しているかどうかにか

調査によると、どんな事情であれ中絶の後女性が罪悪感を持つたり、落ち込んだり、自分が「汚れた」という意識を持つたり、男性を怨んだり、プライドを失ったりするのはよくある事なのです。ここで重要なのはこれらの感情が通常レイプの後に女性が感じるのと全く同じである事です。つまり中絶はレイプで受けた深い傷を更に悪化させるのです。被害者の心の重荷を癒すどころか、むしろ加担するわけ

中絶を勧める人は、レイプの被害者とあまりうまく話し合えず、導けなからです。妊娠を取り消せば、問題を隠せる訳です。中絶という手早くして簡単な方法で対処する事によって、被害者の女性感情緒面、社会面、経済面で本当に何を必要としているのか関わるのを避けているのです。

キャスリーン・ディジーは次のように言っています。

ます。「私はレイプを乗り越え、レイプで妊娠した子を育ててきました。レイプや近親相姦があるから中絶を合法化せよと言うのを聞いたびに、非難され、中傷されているように感じます。私達が意見を言う機会さえ与えられていないのに、中絶合法化を勧めるために賛成派に口実として使われているように思います。」

近親相姦の

被害者を追い込む

近親相姦による妊娠中絶反対については、さらに厳しい現実があります。近親相姦の被害者は自分から中絶に同意する事は先ずありません。妊娠を望まなかったものとするよりも、妊娠によって近親相姦が暴露されるから関係を断つ事が出来ると考えるのです。又、その子との間

にこれまでの虐待される関係とは全く違つ、真に愛情深い関係を築く事に希望を見いだそうとします。しかし、被害者に近親相姦からの救出と愛情への希望を与える妊娠も、加害者にとつては脅威となりません。同時に、虐待が行われている事を認めたくない他の家族にとつてもその異常な秘密を脅かすものです。この二者によって、被害者は望まない中絶手術を強制されるのです。

例を挙げましょう。イーディス・ヤングは12才の時義父の子を妊娠しました。その子の中絶して、25年経つて、こう書いています。「この長い年月、ずっと私は落ち込み、自殺を考え、荒れ、怒り、孤独を感じ、喪失感を抱いてきました。あなたにとつて最良の方法だと言われた中絶は実はそうではなかったのです。ただ彼らの世間体を守り、彼らにとつて厄介な

者を処理し、彼らの生活を何事もなかったように続けさせただけだったので。どんな経緯で妊娠したにせよ、娘を中絶した事を後悔しています。」

このような証言を無視し、未成年者が中絶を強制されていないか、近親相姦ではないか等を調べないで中絶を行うのは、実質的に加害者に加担している事になります。それは被害者から子を奪うだけでなく、犯罪をおおいかくし、加害者を賛助し、被害者を加害者のもとに引き渡して、犯罪を続けさせているのです。

最後に私達は性暴力によって生まれた子の声にも耳を傾けなくてはなりません。レイプによって生まれたジュリー・マキマは性暴力による妊娠中絶に反対して、熱心に運動しています。被害にあった母親の苦しみを思いやると同時に、彼女は母の勇気と寛

大さを誇りにしています。自分の出生について彼女はこう宣言しています。「大事なのは自分がどう生まれたかではなく、自分が何になるかという事です。」

それは、私達みんなの共通のスローガンとなるものではないでしょうか。

POST-ABORTION

REVIEW '93

『完全でない命、それでも生きる価値はある』

若い研修医の頃、私は「尊厳死」を支持していま

者への奉仕に従事することへと変えてゆきます。

した。私は医学について全て知っていると誤って、たし、またある意味では知ってしまいました。私の間違いは、生命というものに対する狭い見地しか持つていなかったということ

13年前、四歳の娘のケイシーが病気であるということ、病院の緊急部屋に呼ばれました。私は彼女のかわいい小さな顔が青白で灰色なのを見てひどく傷つきました。彼女の眼が

（Reye's syndrome）をとまなっていました。その朝、私は娘に筋肉のけいれんのために薬としてアスピリンを与えて幼稚園に行かせたのです。ライズ症候群は悪性の脳の病気で、その当時に、かかった人のうち50%もの命を奪い、生き残った人の30%から40%もの脳を冒し、傷つけていました。

者なのだからあの子の診断がどうであるか、またその恐ろしい結末はわかっているはず。よくてもかなりの障害を持った子供になり、あなた方の負担になつてしまいます。ですからこれ以上の蘇生処置をやめることを私は勧めます」と言いました。

た。今、彼女は大学に進学する準備をしています。私にとつて、小児病院でのあの日は、医者として、また、父親としての人生を変え

それから23年間、医療の場に――医者として、神経学者として、教授として、そして父親として――いて、現在私の見地は広がりました。それは、欠陥のある子供でも、すばらしい愛すべき人間になれるということを見てきたからです。そして多くの場合、その子は家族の焦点を、「幸福」と富を追求することが、助けを必要としている

「何を待っているんだ、何とかしてくれ」、私は付き添いの医者と看護婦に叫びました。医者は静かにこう答えました、「あなたも医者だからどうすればいいか分かるでしょう。」

妻と私はケイシーに付き添って小児病院へ向かう救急車に乗りました。途中で、彼女の呼吸が止まり、私は無我夢中でマウス・ツィ・マウスの蘇生法を始めました。一回一回の呼吸で私自身の命を彼女に送り込むために。

めなないで！」ケイシーはその四日後に昏睡状態から醒めましたが、動けもしやべれもしませんでした。

この敬虔で非常に親密な家庭に彼女が産まれたことで、家族に新しい神の導きが与えられました。両親と子供たちが一緒に彼女の娘とその妹のために献身的で愛情のある雰囲気を作り出していくこと

によってそうなったので
す。

写真会社の技術者であるルーベント、彼らの子供たちの面倒を見るために家に残っているマーサは、ほかの人たちを助けることに喜びを覚え、二人ともこの代で社会事業の学位を取るために、大学へ頑張つて通いました。マーサは修士の学位を取り、ハーバード大学から博士号を取るようにとの誘いも受けています。

不具の娘との経験は、同じような問題を抱えた何千もの人々、さらには健康ではあるけれども、命のより深い意義を探し求めている人々への希望ののろしとなりました。彼らは逆境の中で意義を見つけたわけです。彼らは命を善と悪、美と醜、健全と不具、知的と知恵遅れとのコントラストで満ちた、連続体であると見たのです。

欠陥があったり逆境に

いる場合の方が、美しく完全である場合よりも我々により良い見地を与えてくれます。それは、不完全であるということが、我々に人生の中で何が大切であるかということを感じさせてくれるからです——
— 与え、愛し、今持つているものに満足し、お互い助け合うことです。

Dr. V. Fortanasce

近親相姦の共犯者

今にして思う、「子どもの命のために、

私はもつと行動し、闘い、立ち向かうべきだった」と・・・

私は近親相姦の犠牲者だ。中絶の理由としては、かなり「悲惨な例」と言えるだろう。

15才の時、父に犯された。父による強姦は初めてではなく、また最後にはなかった。が、ともかくこの時、妊娠した。

ある夜、とても気分が悪いので、両親に病院へ連れて行ってもらった。「重い風邪に加え、妊娠19週目に入っています。」と緊急医。

父はひどく怒って、あることないことを私を責め、すぐに中絶するよう言った。医師は私に妊娠を告げ、どうしたいかと尋ねた。私は高校の宗教の時間に「沈黙の叫び」というビデオを見て、中絶は殺人であると分かっていた。父親が誰かを

知っているだけに、罪の意

識で胸が張り裂けそうだった。それでも他の手段「つまり殺す」より産んだほうがいいだろう。中絶を断る事にした。

怒り狂った父は、私がどうしても同意しないなら、医師に頼んで力づくでも手術を受けさせると言った。医師が私の意志を汲み取って手術を拒むと、父は

「金はいくらでも出すから、とにかく手術をしてくれる医師を探してくれ」と要求した。

1時間もしないうちに、男の人が病院に現れた。私には挨拶すらなく、両親とだけ話して中絶を決めました。彼らの言うなりに

逃げようとしたが、看護婦3人に取り押さえられた。そして、手術の用意が出来

るまで身動き出来ないように私をベットにし、つけ、筋肉弛緩薬を打った。

「いや！中絶はいや！」と泣き叫んだが、「うるさい、わめくんじやない！」と医師。結局、全身麻酔を打たれ、私の子どもは無惨にも死んで行った。

「中絶すれば、すべて丸くおさまる」と周囲は言う。そもそも、本当の問題は別の所にあるということに。

「お父さん、お母さんの言う事が正しいよ。」両親は世間体ばかり気にしているというのに。

「あなたの選択は正しかった。」私の選択？選ぶ余裕も与えてくれなかつた。何より、子ども

死んだ子ども(女だった
そつだ)を思って、悲しみに
泣きくれた。虐待を受け
中絶された事実は忘れよ
うとしても無理だった。今
命を守るために、私はもつ
と行動し、闘い、立ち向か
うべきだった」のだ。

私の置かれた状況はあ
まり一般的とは言えない
が、決して特殊でもない
と思う。中絶によってわき
おこる感情や問題は、経験
した女性全てに共通のもの
だろう。レイプや虐待を受
けた心身の傷は、中絶に
よってさらに増すばかり
だ。赤ちゃんを死なせてし
まったという罪の意識を
一生背負って行かねばな
らない。

父親——自分を愛し、
守ってくれるよう神がお
つくりになった存在——そ
の父による強姦と裏切り
はその後も耐える事がな
かった。虐待され、痛めつ
けられ、あげくの果てに、

またも無理やり中絶させ
られた。

プロ・ライフ主義の人さ
えも、レイプや近親相姦に
関しては例外的に中絶を
認め、それがあたかも母親
への「思いやり」だと考え
るのはなぜか？それ以外
「理解ある」解決策がない
というのだろうか？私の

中絶は、状況から察して正
当だと、プロ・ライフ派の
人達は言う。ならば私も言
いたい。「本当に同情して
くれるなら、母親に子ども
の命を選ぶ余裕を与えて
ほしい。被害者である母を
憐れんでくれるなら、子ど
もを殺して利益を得る人
間に利用される事のない
よう、守って欲しい。子ど
もを亡くした記憶は生き
ている限り消えないのだ
から」と。

今後、このように「悲惨
な例」を耳にする事があつ
たら思い出して欲しい。暴
力などが原因の妊娠は母
親にとってどんなに辛い

かということ。母親に
とっては身を引き裂かれ
るような気持ちなのだ。中
絶を選ぶだなんて、赤ちゃ
んにしてみれば納得でき
ない話だ。母親達は愛と援
助と理解を求めている。子
どもを殺すため、体を傷つ
けられる苦痛などいらな
い。これほど多くの問題や

それにまつわる悲劇が起
こっているにも関わらず、
周囲の人間が不幸な母親
達に真の愛と理解を持っ
て接しない限り、無力でい
たいけな胎児は、声もなく
身を守る術もなく、生きる
チャンスすら与えられな
い。

私の中絶は5年以上も
前になる。神は私をいやし
て下さるが思い起こせば
辛く長い闘いだ。プロ
・ライフ主義にはもちろ
ん賛成だが、この手紙を書
くべきかどうか、かなり悩
んだ。身内しか知らない私
の体験を話さねばならな
いからだ。私の思いを完全

に分かってもらうのは無
理だろうが、プロ・ライフ
派の生への確固たる姿勢
を応援したくて。
最後にこの言葉を贈り
たい。
「主は打ち砕かれた心の
人々をいやし、その傷を包
んでくださる」
(詩編：147：3)

PAR-W/1993

受胎に

いたるまで

女性の胎内で受胎はど
のように起こるのでしょ
うか。その答は誰もが知っ
ているように、ちつに精子
を送り込むという性行为
によってです。1回の射精
で、2-3億個もの精子が
放出されます。精液は活発
に動く細胞(精子)の集合
体で、顕微鏡でのぞくと、
おたまじゃくしによく似
ています。精子はしつぽを
動かしながら泳いで、子宮
の入り口にたどり着き、そ
の中へと入っていきます。
このように精子が子宮に
行き着くためには、子宮は
いわば「開いた」状態でな
ければなりません。これは
一体どういう事でしょう
か。

女性の月経周期による
と、子宮口はその大半の時
期、粘膜で厚くおおわれて

いて、精子が入り込むのは殆ど困難です。子宮口にあらかじめ保護膜が張られていると考えると下さい。でも、1ヶ月のうちほんの1時期、この粘膜が消え、代わりに、水のように薄く卵白に似た粘液が現れます。この時精子は栄養を蓄えながら、非常に簡単にこの粘液を通って行く事が出来るのです。

いったん子宮口内に入り込むと、精子は子宮まで泳いで行き、卵管への入り口を見つめます。精子はさらに旅を続け、時間をかけてゆっくりと卵管に到達します。卵管と言うのは普通のパイプのように単純な作りをしていません。らせん状に入り組み、ねじれたり曲がったりしているのです、精子がたどり着くにはかなりの時間を要します。それにもかかわらず、卵管の内部をおおっているせん毛は卵子の移動を助け、そしてようやく精子

は卵子と出会います。

こんなにも旅が長く困難な理由はなんでしょう。それは欠陥があったり奇形だったり、小さすぎたり弱すぎたり、要するに正常な人間となりうる能力のない精子を除去するためなのです。最も強く健康な物が勝利を飾ります。勝者は卵管の端のひだに到達します。そのひだは、まるでタコの足のようなきをし、精子を卵巣に導きます。そしてようやく精子は卵子に出会えるのです。

ジョン・C・ウィルキー

医学博士